

田辺町埋蔵文化財調査報告書 第7集



大住南塚古墳発掘調査概報II

1987

田辺町教育委員会

大住南塚古墳発掘調査概報II

1987

田辺町教育委員会

序

田辺町北部の大住地域に夫婦塚のごとく2つの大きな古墳が並んでいます。北の低い側に位置するのが、大住車塚古墳で通称チコンジ山と呼ばれています。周囲に濠をもつ前方後方墳ということで古くから注目され、昭和49年に国の史跡指定を受けました。

一段高い側に位置するのが、今回調査をしました大住南塚古墳で、前方後円墳だろうといわれてきましたが、昨年年第1次調査によって前方後方墳の可能性が高くなり、墳形の確定が待たれていました。

本年の第2次調査の結果、大住南塚古墳は4世紀後半に築造された周濠をもつ前方後方墳であることが判明し、周濠をもつ前方後方墳が2基並ぶという我が国でも唯一の極めて貴重な発見になるものと考えます。

最後になりましたが、昨年に引き続き調査を快諾された土地所有者の方がたをはじめ、種々ご指導・ご協力いただきました関係者各位、暖冬とはいえ寒風吹きすさぶなか調査に従事された方がたに心よりお礼申しあげます。

昭和62年3月

田辺町教育委員会

教育長 吉 山 勝 平

例 言

1. 本書は、昭和61年度事業として、田辺町教育委員会が実施した大住南塚古墳発掘調査の概要報告書である。
2. 現地調査は昭和62年1月14日に開始し、昭和62年3月11日に終了した。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

調査主体	田辺町教育委員会	
調査責任者	田辺町教育委員会教育長	吉山勝平
調査指導	京都府教育庁指導部文化財保護課	
調査担当者	田辺町教育委員会社会教育課	鷹野一太郎
調査事務局	田辺町教育委員会社会教育課	(課長 加藤晴男)
調査補助員	岩崎信・青代智・岡山努・北村太・堀井真樹・吉田慎太郎	
4. 調査に際し、次の土地所有者の方がたに多大なるご協力をいただいた。(敬称略)

大字大住小字八王寺21・34	藤田伊三郎
大字大住小字八王寺35	大久保泰男
大字大住小字八王寺37-1	大林清一
大字大住小字八王寺38	小田太喜男
大字大住小字八王寺40	岩本俊彦
5. 調査期間中に次の機関ならびに諸氏から多大なるご指導・ご協力を受けた。記して感謝の意とします。(敬称略・順不同)

関西航測株式会社

小野忠熙・中谷雅治・高橋美久二・奥村清一郎・川西宏幸・橋本清一
6. 本書の編集・執筆は鷹野が行ったが、葺石石材については橋本清一氏より報文をいただいたので併せて報告する。また、整理に際し市川一美・博田久美子の協力があった。

本文目次

I はじめに	1
II 調査経過	3
III 調査概要	4
IV 出土遺物	10
V まとめ	11
付載 大住南塚古墳葺石の石材	14

挿図目次

第1図 調査位置図	1
第2図 大住車塚・南塚古墳地形図（梅原報告より再トレース）	2
第3図 大住車塚・南塚古墳地形図（龍大報告より再トレース）	3
第4図 5・5-2トレンチ実測図	5
第5図 1・10トレンチ実測図	6
第6図 7トレンチ実測図	6
第7図 8・8-2トレンチ実測図	7
第8図 大住南塚古墳調査図	折込
第9図 4-1・4-2・4-3トレンチ土層断面図	9
第10図 F2トレンチ土層断面図	9
第11図 遺物実測図	11
第12図 明治19年の地形図	12
第13図 礫の大きさの測定方法	14
第14図 礫の円磨度の段階表	14
第15図 くびれ部、後方部西コーナー葺石の石材	15
第16図 くびれ部、後方部西コーナー葺石の方向と傾き	15
第17図 後方部東コーナー付近葺石の石材	17
第18図 前方部南コーナー葺石の石材	17

付 表 目 次

第1表	大住南塚古墳葺石（現位置石）の石材……………	19
-----	------------------------	----

図 版 目 次

図版第1	大住南塚古墳・大住車塚古墳空中写真	
図版第2	(1) 大住南塚古墳全景（南から） (2) 大住南塚古墳全景（西から）	
図版第3	(1) 大住南塚古墳外堤部（南東から） (2) 大住南塚古墳墳丘北側の池（北から）	
図版第4	(1) 5－2トレンチ後方部西コーナー（西から） (2) 10トレンチ後方部東コーナー付近（南東から） (3) 13トレンチ前方部西側コーナー（西から）	
図版第5	(1) F2トレンチ（南東から） (2) F2トレンチ（北西から）	
図版第6	出土埴輪	

I はじめに

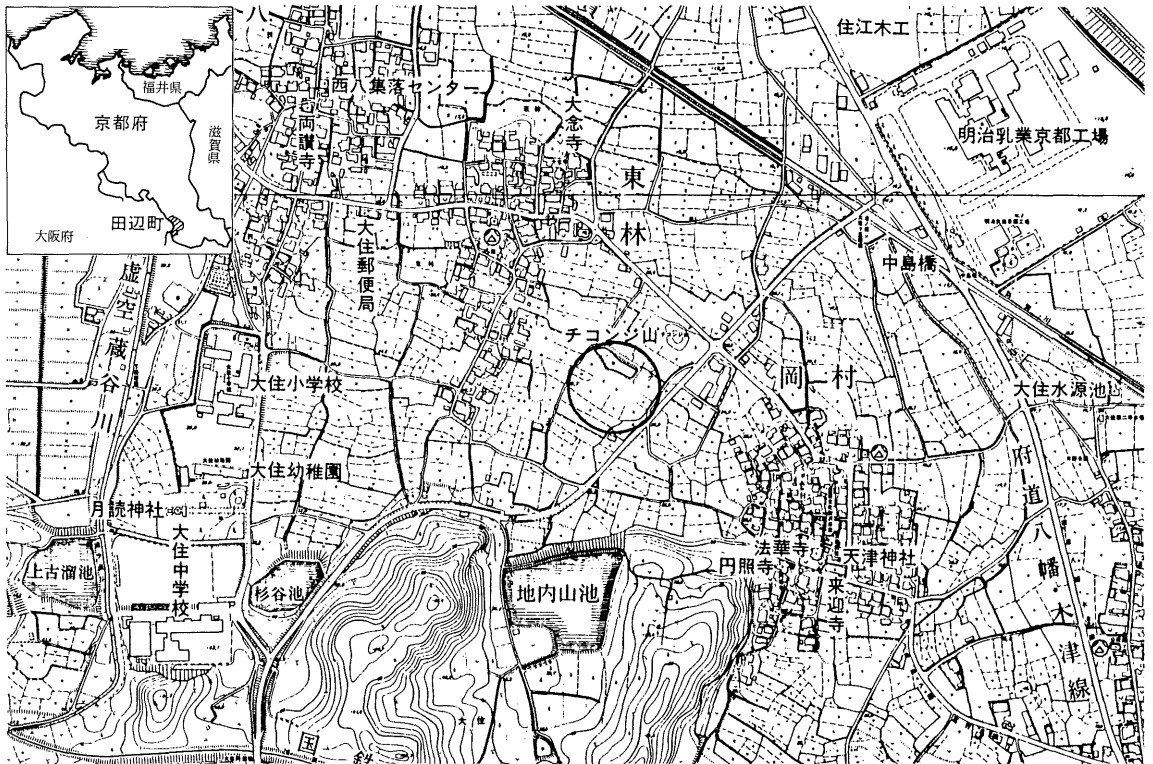
おおすみなみづかこふん

大住南塚古墳は、京都府綴喜郡田辺町大字大住小字八王寺35番地ほかに所在し、岡村・東林両集落の中間に位置する。

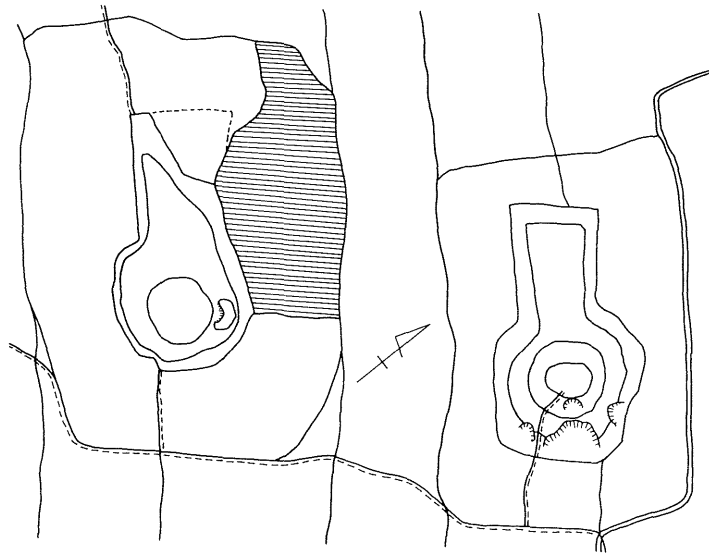
立地は、通称城山につながる緩傾斜地上である。古墳からは、北に男山丘陵・比叡山を望むことができ、南山城平野を北流する木津川まで最短で約1kmを測る。また、本古墳は、北に並んである大住車塚古墳（チコンジ山）や南東の水田中に松の木で痕跡を残す姫塚古墳などとともに、南山城を代表する古墳のひとつとして広く知られ、社会教育・学校教育の教材としても町民に親しまれている。

大住車塚古墳は、墳丘のすぐ東側を府道が通り、車窓からもその美しい形を楽しむことができる。前方部を西北に向けた前方後方墳で、全長約66m、前方部幅約18m・同高さ約1.5m、後方部一辺約30m・同高さ約4.5mをそれぞれ測る。周囲の水田畦畔から平面形が長方形の周濠があることが判っている。主体部については、未発掘のため詳細不明だが、地元の伝承によると竪穴式石室らしい。葺石の存在は認められるが、埴輪の存在は推定にとどまる。昭和49年に国の史跡に指定されている。

今回調査を行った大住南塚古墳は、大正11年の梅原末治氏の発表によると、墳丘は「今や開墾せられて茶及び果樹の畑となり著しく形を損し、特に前方部の如きは其の半ばを失へるの状況」



第1図 調査位置図



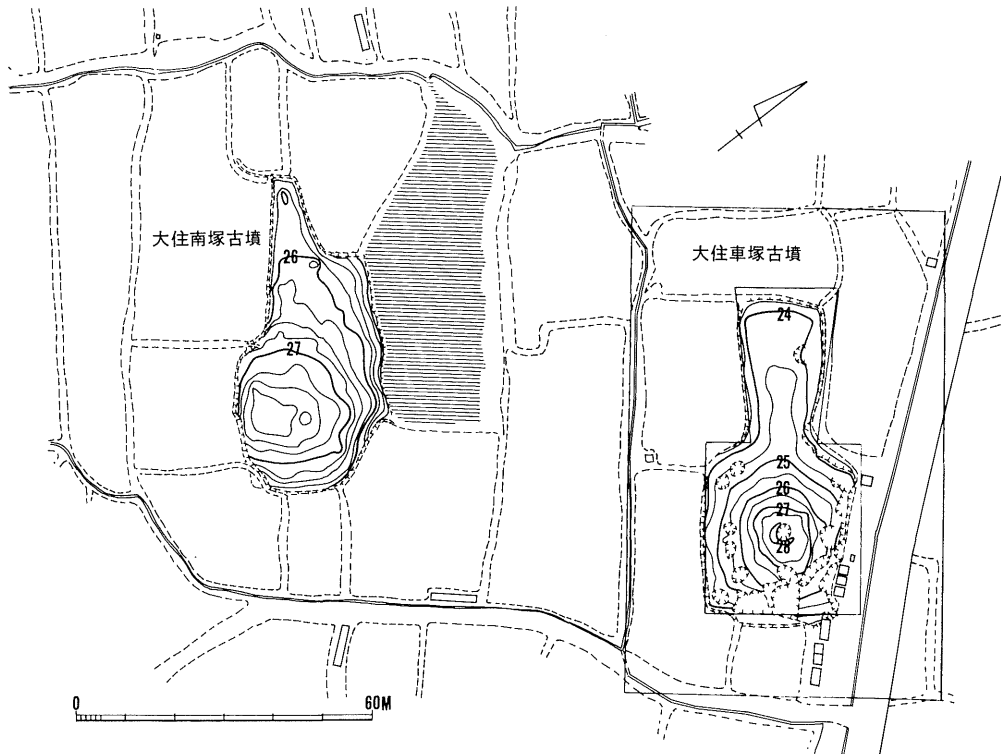
第2図 大住車塚・南塚古墳地形図（梅原報告より再トレース）

（「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』3）であり、現在の様子とあまり変わりなかったようである。昭和47年の龍谷大学学生諸氏による測量調査の発表により、前方部を西北に向けた全長約65mの前方後円墳で、同一水面の盾形周濠をもつとされた（「大住南塚古墳」『南山城の前方後円墳』）。本古墳の主体部は、竪穴式石室であったが明治27年頃の開墾の際破壊されている。その時、石製品七個・刀剣十余口等が出土したことが伝わっている。梅原氏の報告の写真図版をみると、竪穴式石室の天井石一個がみられるが、現在は不明である。また、葺石の存在は確認されているが、埴輪については不明であった。なお、周濠の北側の一部は現在も池（センブ池・ジョンベ池）として残されている。

近年、周辺地において大規模な宅地開発、バイパス工事等が計画されあるいは進行し、田辺町教育委員会としても早急にこの古墳の埴輪等の規模・埴輪の有無等の確認が必要となり、保存のための基礎資料作成のための発掘調査を昭和60年度より行った。

昭和60年度の調査は、盾形周濠をもつ前方後円墳という想定のもと、埴輪の周囲にトレンチを入れ、埴輪の形態及び規模・周濠の規模・埴輪の有無等についての調査を実施した。以下に成果を要約する。

想定の後円部側で確認した埴輪裾を結ぶと円にはなりにくいこと、くびれ部部分で弧ではなく直線的な葺石列が見つかったこと、想定の外堤部分は実は周濠内であったことなどにより、埴輪は前方後円墳ではなく、前方後方墳の可能性が高くなった。周濠は、盾形でなく長方形ではないか、また、周濠底の高さ・周濠内の埋土の様子などから同一水面ではなく、2段程度の水面ではないかとみられた。埴輪は存在が確認され円筒（普通・朝顔形・楕円筒）・家形の各種がみられた。この埴輪の検討により、この古墳は古墳時代前期後半の築造であると推定された。



第3図 大住車塚・南塚古墳地形図（龍大報告よりトレース）

など、これまでの外表調査では得ることのなかった実に多くの成果を収め、貴重な資料を得ることができた。

今回の第2次調査は、前年の成果をもとに墳形の確定及び前方部幅等の規模の確認を主眼として、あわせて墳丘の再測量、一部墳丘の遺存状況等確認について行った。厳寒の中、献身的に作業に従事した諸氏に心より感謝するとともに、折りしも北風の中自らスコップを手にご指導下さった小野忠熙先生にお礼申し上げたい。

Ⅱ 調査経過

今回の調査は、墳丘形態を確定することを最大の目的として実施した。

古墳の現状について述べよう。墳丘部分がかつての果樹園の名残りを留める十数本の柿の木のほかは、人足が立入るのを拒むかのように、雑木・笹竹・イバラが繁茂している。周濠部分の多くは水田や畑として耕作されているが、北側の一部は現在も池としてかつての機能を伝えている。現在でも水のある周濠を見ることができる数少ない例である。

調査はまず墳丘部分の伐採作業から開始したが、前述のような状態のため思いのほか時間を要した。あわせて、後方部を確定するため5・2・10・12トレンチを、前方部幅をつかむため13・8・2トレンチを、また、周濠の幅及びその外側の状況をつかむため昨年度の補足の意味で9・1・9・2・11・4・3・14トレンチを設定した。調査は現状復旧の必要のためすべて人力によ

て行った。

その後、墳丘測量を開始した。測量は百分の一で、20cmごとの等高線を求めた。

次いで、くびれ部の幅をつかむため墳丘上にF1トレンチ、墳丘の遺存度・盛土の状況等を知るためF2トレンチを設定した。

各トレンチ、ことに池に近いトレンチでは湧水・壁の崩落等が著しく、9-1トレンチ及びF1トレンチの東側については、日程・調査費用等から調査途中でトレンチを放棄せざるを得なかった。

なお、昭和62年2月22日に現地説明会を開催し、その後各トレンチの埋めもどしにかかった。また、関西航測株式会社の全面的なご協力で、2月24日に空中撮影を行うことができた。

Ⅲ 調査概要

今回の調査で、大住南塚古墳の後方部のコーナー部・前方部のコーナーの一部を発見することができ、墳丘は前方部を西北に向けた前方後方墳で、後方部の各コーナーがそれぞれほぼ東西南北を向くことが確認された。

＜後方部＞ 5-2・10・12トレンチ

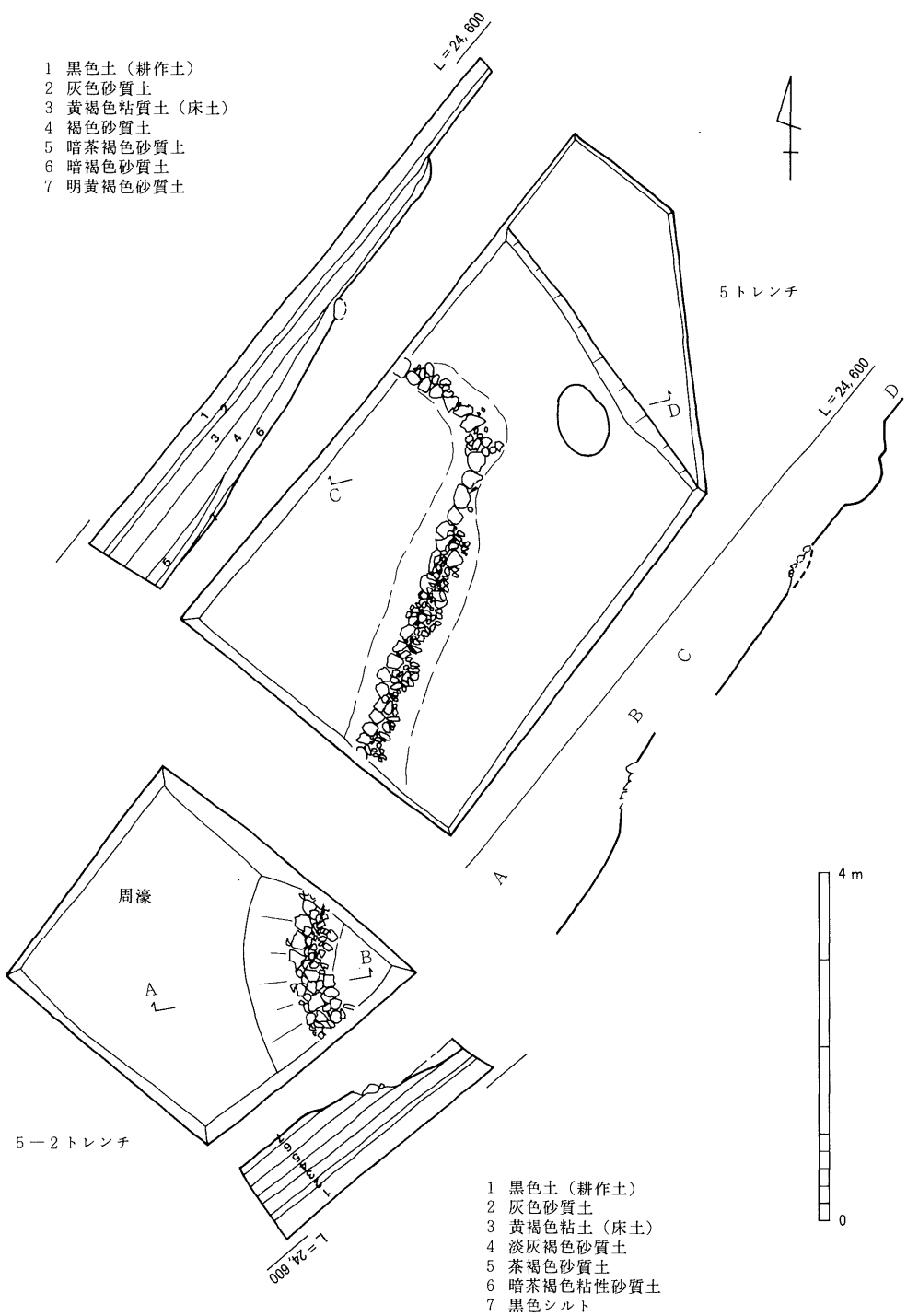
前回の調査でくびれ部をみつけた5トレンチの南西に5-2トレンチ、東コーナーに近いとみられた1トレンチ西側の南に10トレンチ及び南コーナーが発見されると思われる部分に12トレンチを設定した。

5-2トレンチにおいて後方部の西コーナーにあたる葺石列をみつけた。コーナーは丸みを帯びている。葺石は3～4段残っていただけであるが、地山を削り、その上に若干の盛土を行った後、周濠底から20cm程高い所に人頭大の基底石がある。稜線とみられる部分は、人頭大よりやや小さめの石ばかりが直線的に墳頂方向に向け葺かれている。それを境にくびれ部へ向けては拳大の石が多く、後方部南コーナーに向けては大きめの石が多い。築造時の作業を行った人間の差であろうか。稜線上の傾斜角は約20°を測り、基底石下の高さは23.7mである。

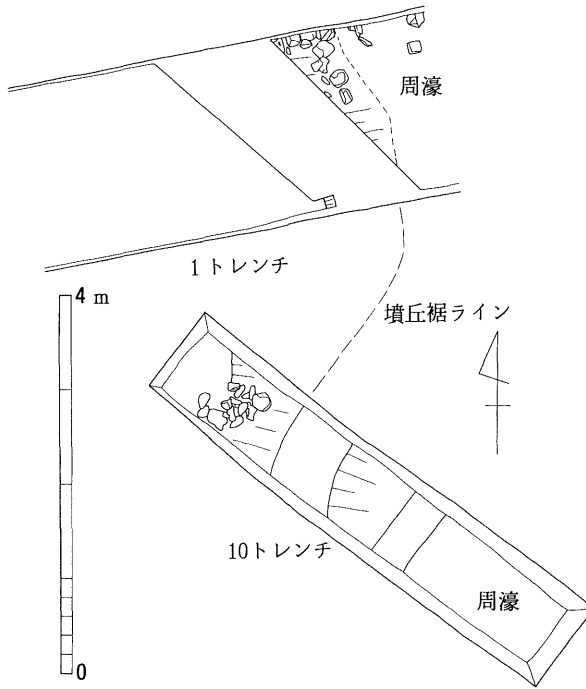
12トレンチでは、多くの石が滑落しており、地山の傾斜変換線を墳丘裾と考えた。この部分は、4トレンチ同様拳大の川原石が大半を占めていた。また、葺石が盛土の後に施された様子は確認されなかった。おそらく地山斜面の直上に施されたものと考えられる。(4トレンチも同様に考えている。) 墳丘裾の高さは23.7mである。

10トレンチでは、周濠底から20cm程高い所の地山斜面上で葺石がみつかった。基底石は人頭大のものである。1トレンチでみつかった葺石とあわせると、丸みを帯びたコーナーが復元できる。基底石下の高さは23.1mである。

発見あるいは復元される各コーナー間の距離は、西・南が33m、南・東が35m、東・西で48m、西・くびれ部で7.5mをそれぞれ測ることができる。また、西・南コーナーと東コーナーでは0.6mの比高差があり、西コーナーとくびれ部ではくびれ部が0.1m高い。

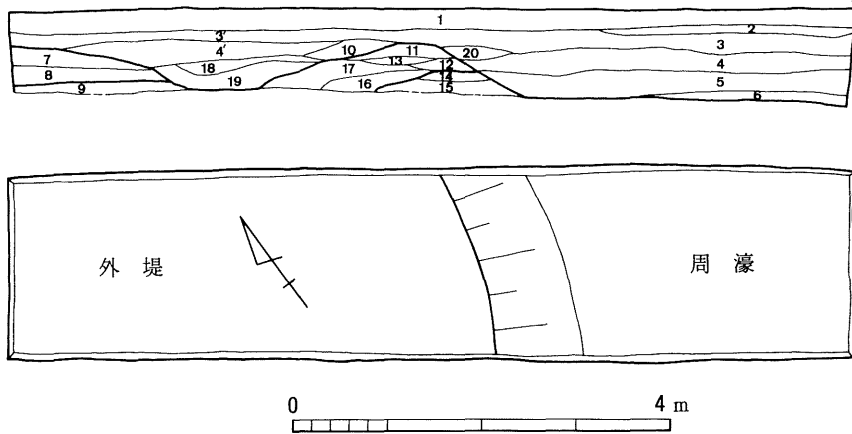


第4図 5・5-2 トレンチ実測図



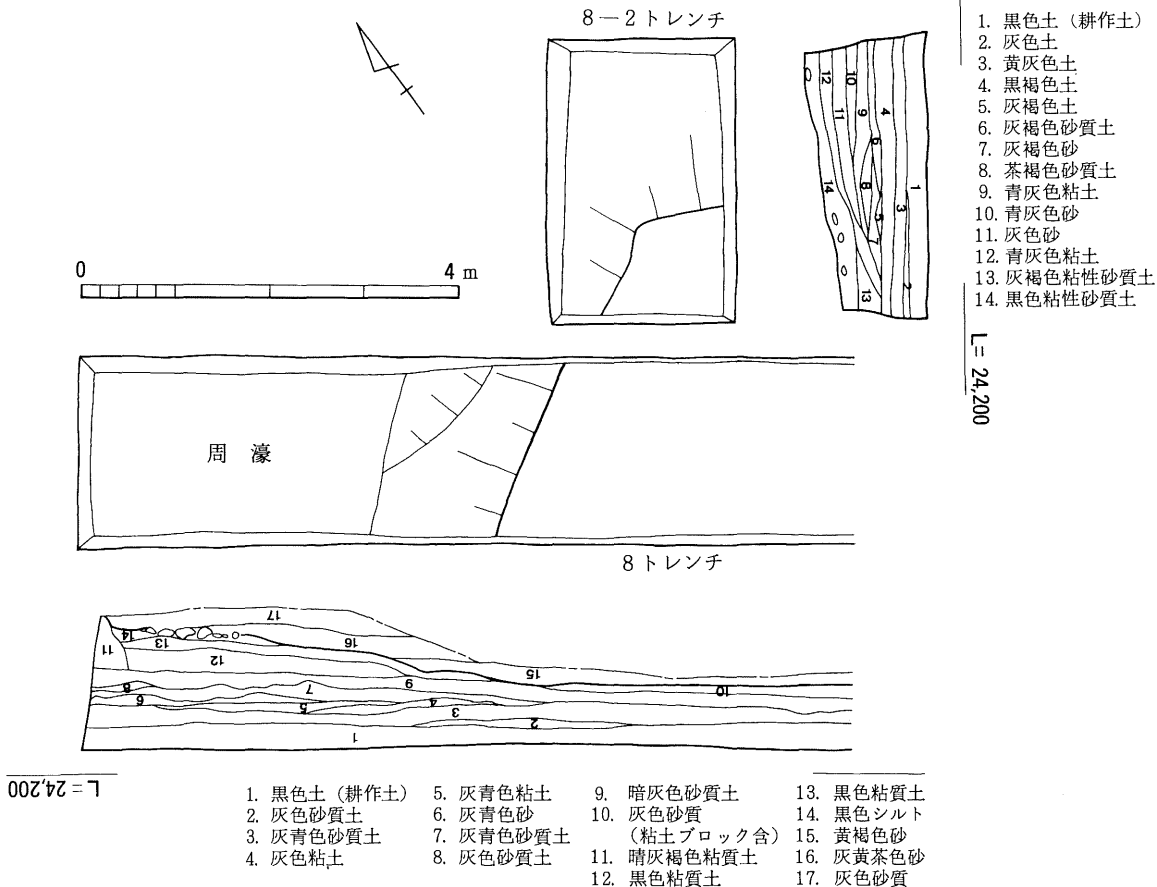
第5図 1・10トレンチ実測図

L = 24,400



- | | | | |
|--------------|---------------|----------------|--------------|
| 1. 黒色土 (耕作土) | 6. 暗灰色粘土 | 11. 暗灰色砂層 | 16. 青灰色礫混り砂層 |
| 2. 灰褐色土 | 7. 暗灰色砂質土 | (10より少し明) | 17. 青灰色砂層 |
| 3. 灰色砂礫土 | 8. 灰色砂層 | 12. 暗青灰色砂層 | 18. 暗灰色砂層 |
| 4. 礫含む褐色砂質土 | 9. 黒色粘土 (旧表土) | 13. 淡褐色砂層 | 19. 混礫暗灰色砂層 |
| 5. 青灰色粘砂層 | 10. 暗灰色砂層 | 14. 黒色砂層 (旧表土) | 20. 褐色砂質土 |
| | | 15. 灰褐色粘土 | |

第6図 7トレンチ実測図



第7図 8・8-2 トレンチ実測図

<前方部> 13・8-2 トレンチ

前回の調査で一部がみつかった前方部側辺の延長線上に13トレンチ、前方部前面がみつかった8トレンチの北東に8-2トレンチを設定し、前方部前面幅の確認を目差した。

13トレンチでは、葺石により前方部南コーナーを確認した。人頭大の基底石は周濠底と同じ高さでみつかった。また、コーナーの南西1mのところに直径約40cm、深さ約10cmのピットが存在する。基底石下の高さは23.3mである。

8-2トレンチでは、前方部前面及び側面の傾斜面がみつかった。葺石はすべて滑落していた。前方部前面の葺石が人頭大かそれよりやや小さめの石がほとんどであったのに対し、側面のものは拳大程のものが大半である。墳丘裾付近の高さは22.5mである。また、前方部前面の幅は約30mを測り、南北両コーナー間では0.8mの比高差がある。

<周濠・外堤> 9-1・9-2・11・4-3・14トレンチ

9-1・9-2トレンチは現在の池の南東に設定、周濠内を9-1トレンチ、外側を9-2トレンチとつけた。9-1トレンチでは、1トレンチで確認した周濠底より下の高さで、外堤斜面

にあったとみられる葺石の転落したものが瓦器と共に発見された。地山面の高さは22.0mであり、前回の調査で確認できた周濠底の高さ22.7m（1トレンチ）より0.7m低い。また、このトレンチ内で周濠の立ち上がりが見つかると思ったがみつからなかった。中世に大規模な造成が行われたのであろうか。9-2トレンチでは、現在の耕作面下0.6mで地山とみられる砂層にあたり、周濠の立ち上がりを求めるとすると現在のアゼ付近に急斜面があると考えられる。

11トレンチでは3トレンチ同様、外堤内側斜面の下場が確認された。この付近の高さは23.4mである。これにより後方部裏側の周濠幅は底で13.5mを測る。

4-3トレンチは、4トレンチの延長上に設定したもので、自然丘陵を削り出して平坦面を造り外堤としていることがわかった。外堤の幅は5m強を測る。また外堤面の検出された高さは24.9mであり、耕作面下0.5mである。

14トレンチは外堤コーナーと推定される部分に設定したが、耕作面下1.5mでも外堤はみつからなかった。これは6-2トレンチでも同じであり、これらの付近が比較的早い段階で崩壊したのと考えられる。また2回にわたる調査で、最も多くの埴輪片が出土したのが6-2トレンチであり、このあたりの外堤上もしくは別区のような区域に家形埴輪を含めた埴輪群がある程度まとめて置かれていた可能性が高い。

周濠部分の層位は基本的に上から耕作土・黄色粘土（床土）・灰色系砂質土（中世の整地層とみられる）・黒色土（有機質含む）・黒色シルト・地山の順であり、常時滞水していたとみてよい。

<前方部墳丘> F1・F2トレンチ

くびれ部の幅を確認するため主軸と直交するようにF1トレンチ、盛土の状況等を確認するため主軸と平行してF2トレンチを設定した。

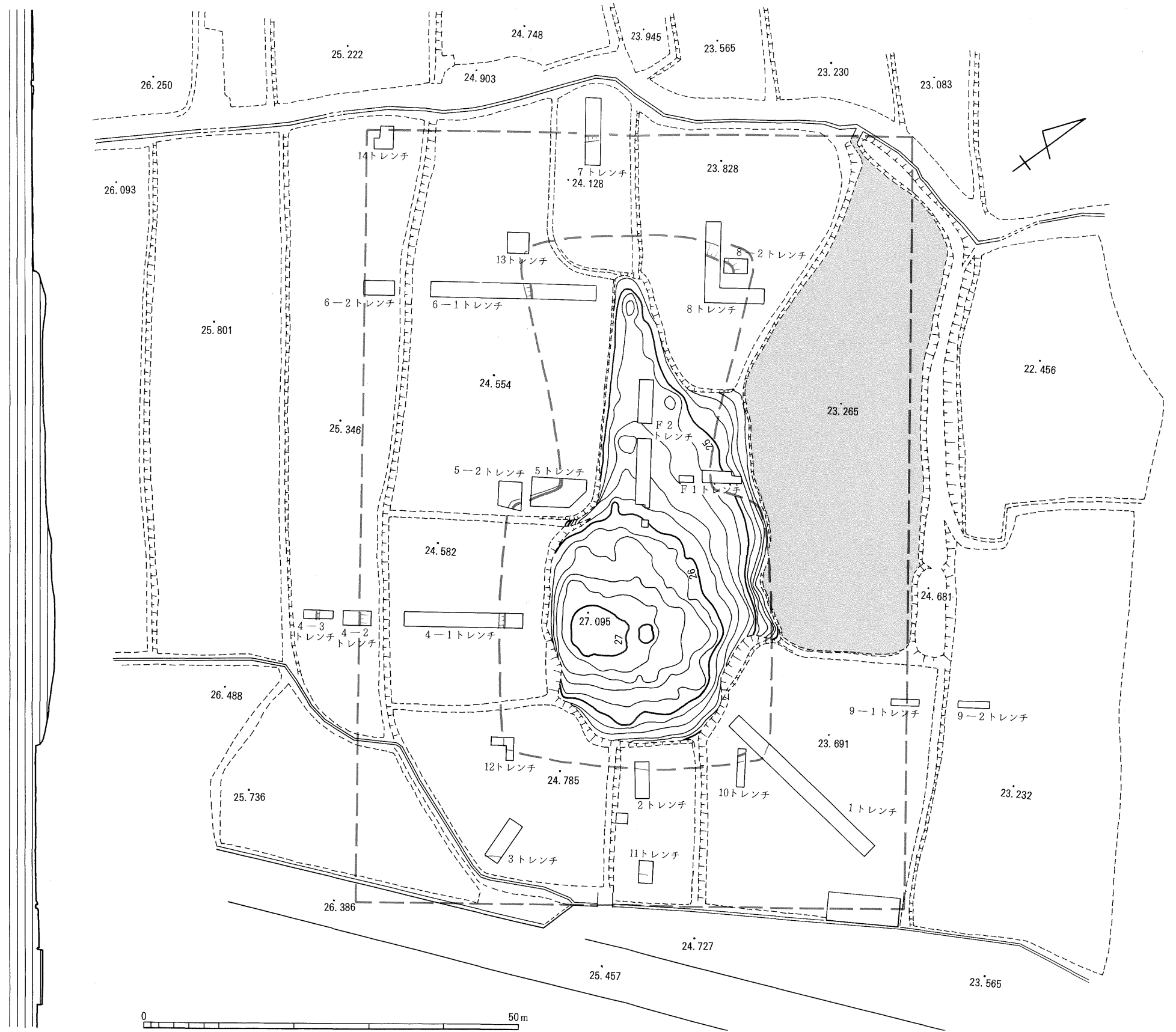
F1トレンチは前述のとおり、湧水・壁の崩壊が著しく途中で調査を断念した。そのためくびれ部での幅は確認できていない。

F2トレンチは後方部との接続部よりやや後方部寄りから前方部先端に向けて設定した。その結果、接続部分及び盛土状況を確認できた。しかし、前方部は後世の耕作・攪乱が著しく現表土下0.6m付近までおよんでいた。接続部分はこのトレンチの範囲内といえることではあるが、前方部・後方部ともに同じ高さまで盛土を行い、その後後方部を形成する盛土を行っている。また、少なくとも前方部の造成にあたっては、狭いトレンチでの断面観察のため明確でなくあくまで推定であるが、あえて述べさせてもらうなら、後方部とのとりつき部分中央から前方部先端付近まで堤状の盛土を行い、後にその両側に順次盛土を行い前方部を形成したと考えている。なお、一ヶ所で地山面を確認した。標高24.1mである。

<小 結>

以上述べてきたことを簡単にまとめてみると、

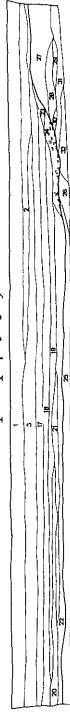
- 古墳築造にあたっては、南西側の丘陵を削り外堤とし、さらに地山を掘り下げ周濠を形成している。



第8図 大住南塚古墳調査図

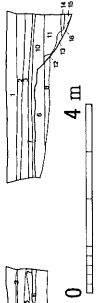
L = 25,400

4-1 トレンチ



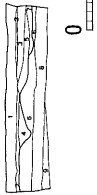
- 9. 褐色砂
- 10. 暗灰褐色砂質土
- 11. 黒灰色砂質土
- 12. 茶褐色粘質土
- 13. 茶褐色砂
- 14. 黒灰色土
- 15. 黒灰色土
- 16. 紫灰色粘性砂質土
- 17. 灰褐色粘質土
- 18. 暗灰褐色粘質土
- 19. 暗褐色土
- 20. 黒灰色土
- 21. 黒色シルト
- 22. 暗灰褐色砂質土
- 23. 黒灰色硬礫土
- 24. 灰白色砂質土
- 25. 茶褐色粘質土
- 26. 青灰色砂質土
- 27. 灰白色粘性細砂
- 28. 灰色砂
- 29. 黄灰色砂礫
- 30. 青灰色粘土
- 31. 暗灰色砂
- 32. 黄灰色粘土

4-2 トレンチ



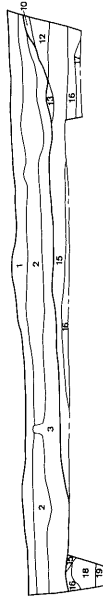
- 1. 黒色土 (耕作土)
- 2. 黄色粘土
- 3. 淡灰茶褐色粘質土
- 4. 淡褐色砂 (少し黄含む)
- 5. 淡灰褐色砂質土
- 6. 黒灰色砂質土
- 7. 黒灰色砂
- 8. 黒灰色土

4-3 トレンチ



- 1. 黒色土 (表土)
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 灰褐色粘質土 (2が流出前の表土)
- 4. 灰色土
- 5. 黄褐色土
- 6. 明黄褐色粘質土
- 7. 黄灰色砂質土 (近世遺物含)
- 8. 黄褐色粘質土
- 9. 灰色土 (近世遺物含)
- 10. 黄褐色砂質土 (レキ含)
- 11. 明黄褐色砂質土 (レキ含)
- 12. 明黄褐色砂質土 (細かい)
- 13. 明黄褐色粘質土
- 14. 淡黄褐色土 (粘質土混り)
- 15. 黄褐色砂質土 (レキ含)
- 16. 黄茶褐色粘質土
- 17. 茶褐色砂質土 (粘土ブロック含)
- 18. 暗褐色粘質土
- 19. 暗黄褐色粘質土
- 20. 黄褐色粘質土
- 21. 黄灰色粘質土
- 22. 灰色土 (粘性強)
- 23. 灰色土

L = 25,600



- 1. 黒色土 (表土)
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 灰褐色粘質土 (2が流出前の表土)
- 4. 灰色土
- 5. 黄褐色土
- 6. 明黄褐色粘質土
- 7. 黄灰色砂質土 (近世遺物含)
- 8. 黄褐色粘質土
- 9. 灰色土 (近世遺物含)
- 10. 黄褐色砂質土 (レキ含)
- 11. 明黄褐色砂質土 (レキ含)
- 12. 明黄褐色砂質土 (細かい)
- 13. 明黄褐色粘質土
- 14. 淡黄褐色土 (粘質土混り)
- 15. 黄褐色砂質土 (レキ含)
- 16. 黄茶褐色粘質土
- 17. 茶褐色砂質土 (粘土ブロック含)
- 18. 暗褐色粘質土
- 19. 暗黄褐色粘質土
- 20. 黄褐色粘質土
- 21. 黄灰色粘質土
- 22. 灰色土 (粘性強)
- 23. 灰色土

第9図 4-1・4-2・4-3 トレンチ土層断面図

第10図 F2 トレンチ土層断面図

- 後方部各辺は直線にならず、その中央が1～2 m突出するようなゆるやかな弧線をえがく。
- 葺石は、盛土を行った後施工される部分（後方部西コーナー付近）と地山の上に施される部分がある。
- 葺石は、傾斜変換線より高い所に基底石を置くところがある。
- 葺石は、箇所により石に大小がある。
- 埴輪は、6-2トレンチ・5トレンチ以外出土量が少なく、当初からその絶対量が少なかったと考えられる。原位置を保つものもみつかっていない。
- 6-2トレンチから、家形埴輪を含め多くの埴輪片がみつまっている。付近に埴輪集中区があったと考えられる。
- 周濠は常時滞水していたとみられるが、周濠底の高さを比べると最高1.1 mの差があるにもかかわらず、周濠内の埋土の状況が各トレンチともほぼ同じであることを考えると、前方部前面と後方部裏側にそれぞれ堤を設け、水面を2段にしていたものと推定される。梅原氏の報告の図（第2図）にみえる小道がこれにあたるのではないだろうか。

IV 出土遺物

2回にわたる調査で出土した遺物は、埴輪・須恵器・土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦・石製品・木製品・銭貨などである。時代的には、古墳時代から近代のものを含んでいる。整理箱につめて14箱であり、このうち南塚古墳に直接関係するものは5箱に満たない埴輪片ばかりである。

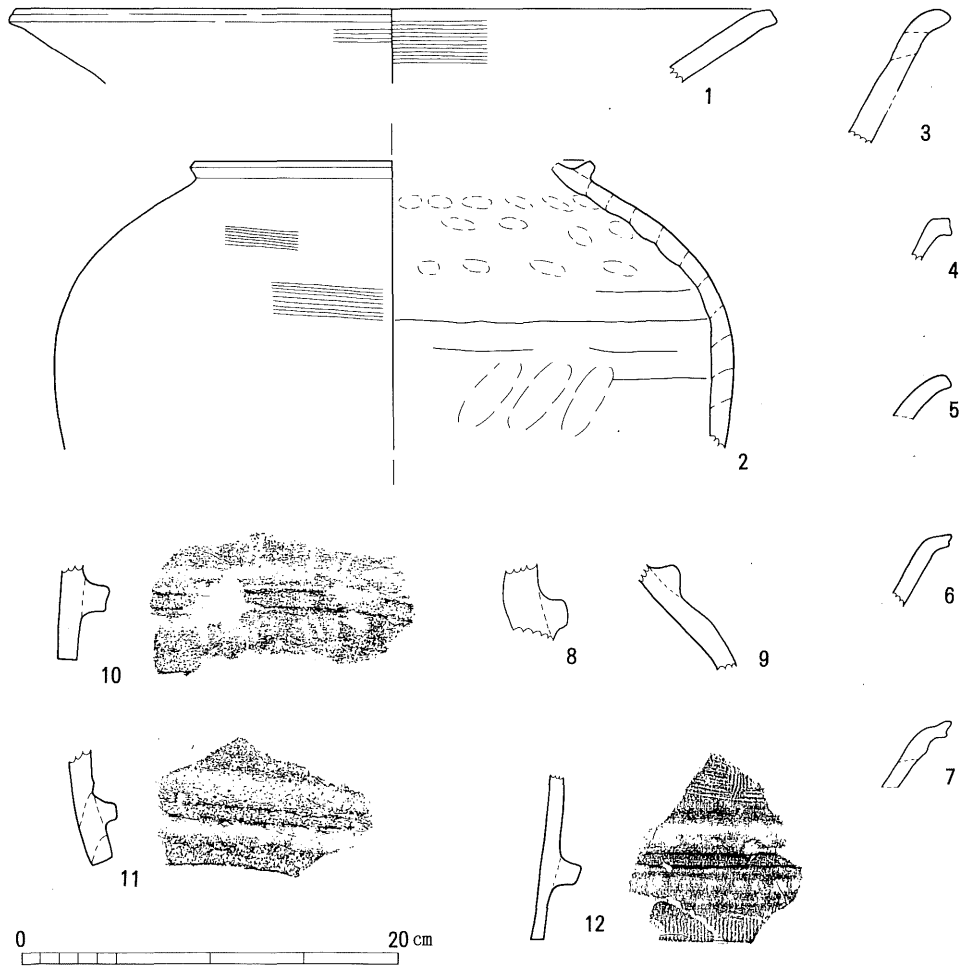
埴輪には、円筒（普通・朝顔形・楕円筒）・家形があるが、摩滅した小片が大半で良好な資料に乏しい。

円筒埴輪 摩滅したものが多く、調整等確認しにくい。小片が多く、径・段高・段数の明らかなものはない。外面調整はタテハケのみのものが大半であり、10本/cmの細かいものと6～7本/cmの2種ある。内面はナデとみられるものが多いが、ヨコハケのものもわずかにみられ、ヘラケズリするものがある。突帯は断面台形のものほとんどで、強くナデて上方あるいは下方に突出させたものはない。透し孔は、段の上の突帯近くにあるものも多く、円形、矩形のものがあり、それらには逆三角形・半円形のものが含まれる可能性がある。胎土は、砂粒が少なく雲母が目立つものと、赤色粒を多量に含むものの2種が殆んどである。黒斑をもつものがある。

1は朝顔形の口縁部。口径38.8cmに復元されるが正確ではない。内外面にヨコハケがみられる。2は朝顔形の肩部。薄手できゃしゃな感じがする。比較的肩が張り、細い台形の突帯がつく。外面にヨコハケがみられる。3～7は口縁部である。8・9は朝顔形の頸部。8は厚手で壺形埴輪の可能性もある。10・11は楕円筒のもの。突帯のすぐ下に矩形あるいは逆三角形の透し孔をもつ。

家形埴輪 (12) 基底部で、外面は粗いハケ、内面はヘラケズリされる。外面に赤色顔料がのこっている。

以上の埴輪は、突帯の形態・内面ヘラケズリ調整・矩形の透し孔より概ね4世紀代に位置づけられるが、ヨコハケが少しみられること・円筒埴輪のなかに楕円形のものが含まれることより4世紀でも後半に年代を求められる。



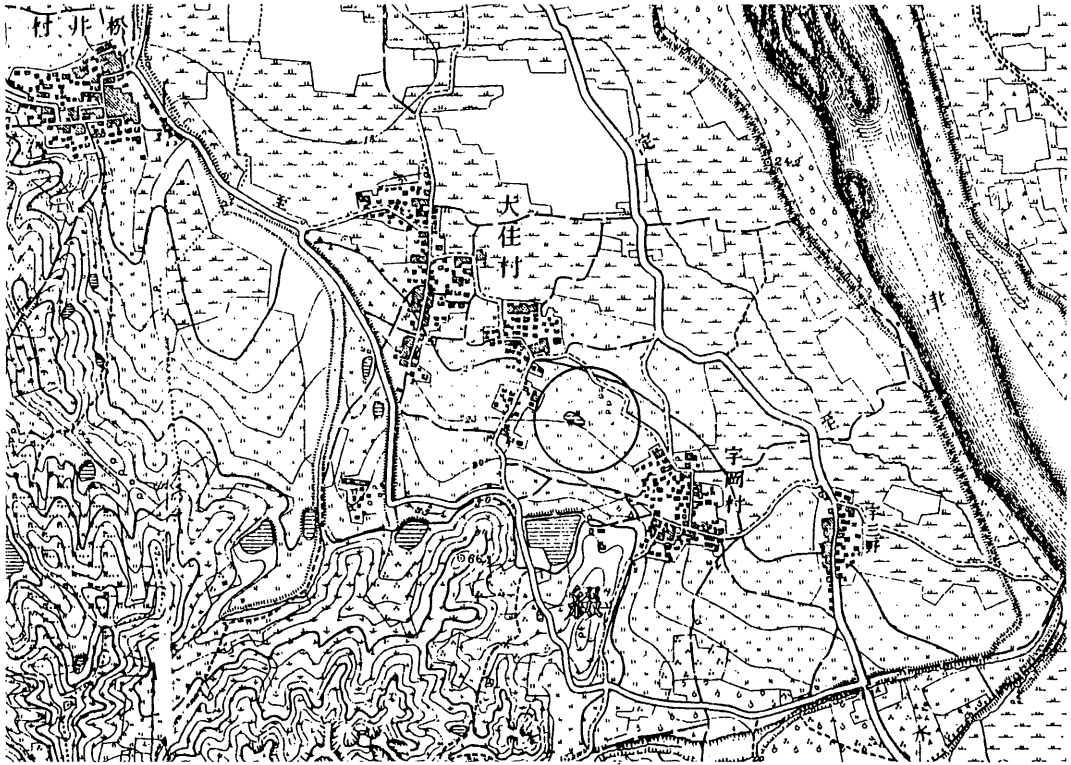
第11図 遺物実測図

V まとめ

2ヶ年にわたる調査を終え、確認したこと、気づいたこと、問題点となること等を述べまとめにかえたい。

立地 生駒・甘南備丘陵から派生し北に突出した大阪層群からなる通称城山につながるように、木津川により形成された段丘礫層の上に扇状地性の堆積層がおおっていると推定される北東木津川に向かう緩傾斜地上に立地し、傾斜方向に直交させて主軸をおいている。このような緩傾斜地がいつ形成されたかなど、地質学的な面からの調査も必要となろう。現在の木津川からは約1 km 離れているが、当時はより近くを流れていたとも考えられ、航行の際また北・東方向からは十分その荘厳なたたずまいをみる事ができたであろう。

墳丘 南西に高く北東に低い緩傾斜地を掘り下げ周濠とし、その土砂を盛り上げて墳丘を形成している。その際、南西側と北東側とが同じ高さになるまで掘り下げてはいない。南西側つまり



第12図 明治19年の地形図

後方部から前方部を向いて左コーナーから後方部真裏にかけては概ね23.5 mが地山面であり、同右コーナーから後方部東コーナーにかけては22.5~22.8 mが、前方部前面の外堤部分では23.0 mが地山面である。また、墳丘として確認された地山の高さは、後方部東コーナー付近（1・10トレンチ）で23.4 m、同南東辺（2トレンチ）で23.8 m、同南西辺（4トレンチ）及びくびれ部（5トレンチ）で24.2 m、前方部南辺（6トレンチ）で24.0 m、同北コーナーで22.9 mである。前方部前面の外堤（7トレンチ）では、23.4 mで古墳築造前の表土が確認された。

以上により築造に際しては、緩斜斜地の傾斜方向に対し直交するように主軸をおき、後方部と前方部とをみた場合、より高い側に後方部をおいたことがわかる。

前方部での小規模な立ち割りによると地山面の高さは24.1 mであり、現在の表面から測ると、前方部で最高1.6 m、後方部で2.8 m程度の盛土が行われたことが判るが、現状は築造当時とかなり異なり、本来はさらに高かったことが推測される。

古墳の復元 2ヶ年にわたる成果をもとに古墳の復元を行ってみたい。

墳丘は、全長（前方部先端裾から後方部裏側裾までを測る）71 m、後方部一辺最大で37 mである。各コーナーとも丸みを帯び、くびれ部に向けての北・西コーナーは約110°、くびれ部は約100°を測る。前方部幅はくびれ部で20 m、先端で30 mに復元でき、前方部コーナーについても後方部以上の丸みをもつコーナーが考えられる。

周濠は、平面長方形のものを想定している。規模は外堤内縁で103 m×73 mに復元できる。前

述のように同一水面でなく2段水面と考えるが、境となる堤は検出していないので、将来の課題のひとつとなろう。

古墳の年代 出土した埴輪より、4世紀後半に築造されたものとみられる。北側に並んである大住車塚古墳は、南塚古墳と直接比較できる資料はないが、一段低いところに立地し、南塚古墳に続くものと理解したい。

以上2ヶ年にわたる調査について述べてきたが、大住南塚古墳について簡単にいうならば、四世紀後半に築造された周濠をもつ前方後方墳ということになる。

他の四世紀代の古墳の多くが丘陵地に築かれる南山城地域にあって、いち早く水をたたえる周濠という先端技術を取り入れた集団とはどのようなものであったのか、しかも前方後円墳ではなく、前方後方墳を築いたのはどのような理由によるものかなど今回の調査によって明らかになった疑問点も多い。今後の課題である。

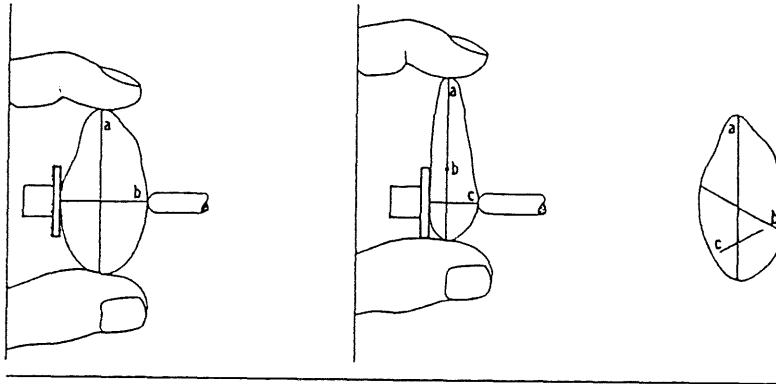
参考文献

- 梅原末治「大住村車塚古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』3 京都府 大正11年)
万波俊介「大住車塚古墳」(『南山城の前方後円墳』 龍谷大学考古学資料室 昭和47年)
奥村清一郎「大住南塚古墳」(『南山城の前方後円墳』 龍谷大学考古学資料室 昭和47年)
鷹野一郎『大住南塚古墳発掘調査概報』(田辺町教育委員会 昭和61年)

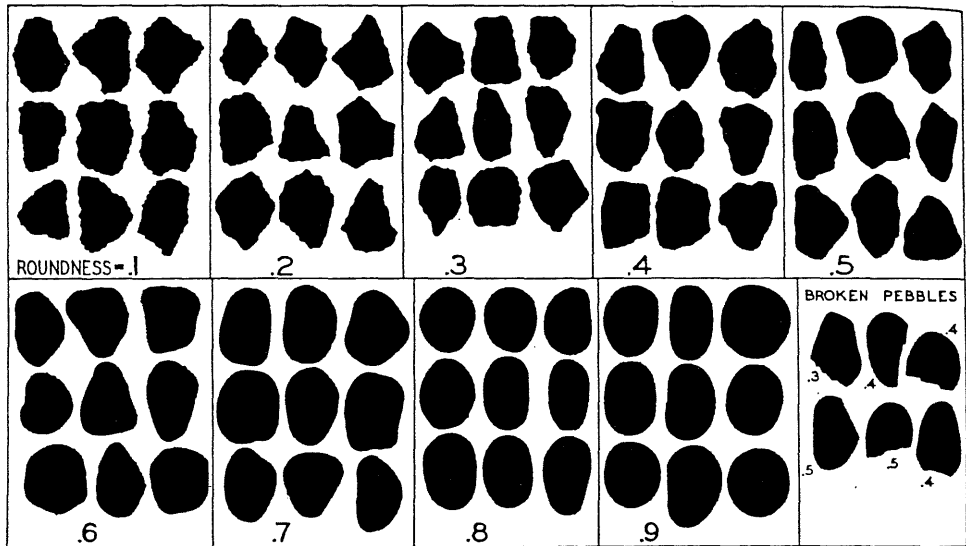
田辺町 大住南塚古墳葺石の石材

橋本 清一

はじめに 田辺町教育委員会による1986・1987年の2回にわたる大住南塚古墳の発掘調査が行われ、全長71m、後方部一辺37m、くびれ部幅20m、前方部前面幅30mの規模をもつ前方後方墳であり、古墳時代前期4世紀後半の築造であることが明らかにされた。

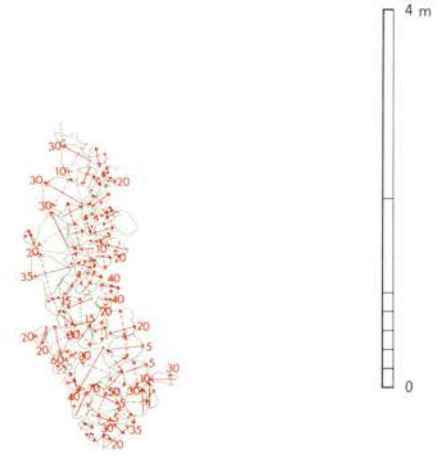
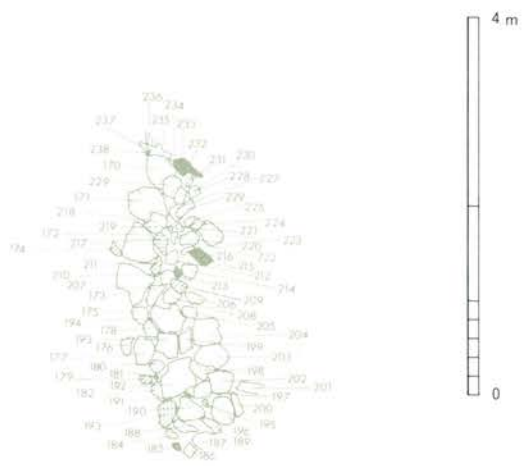
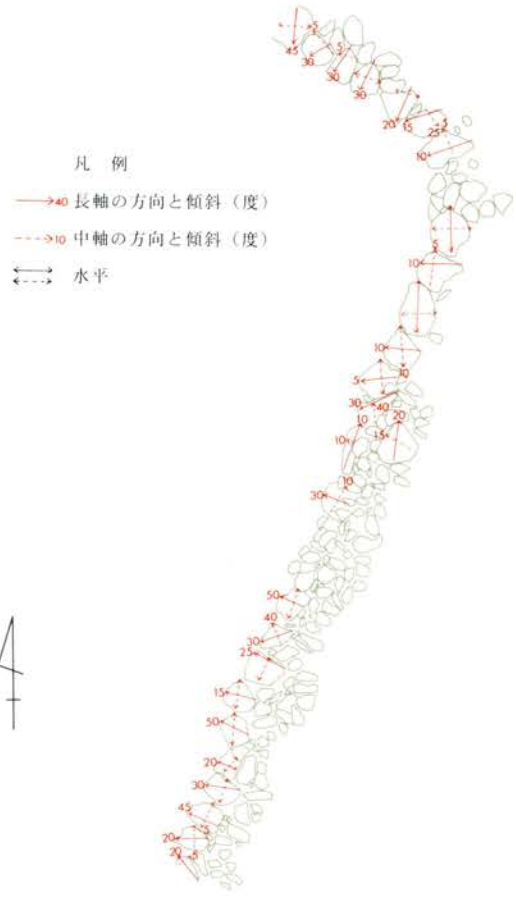
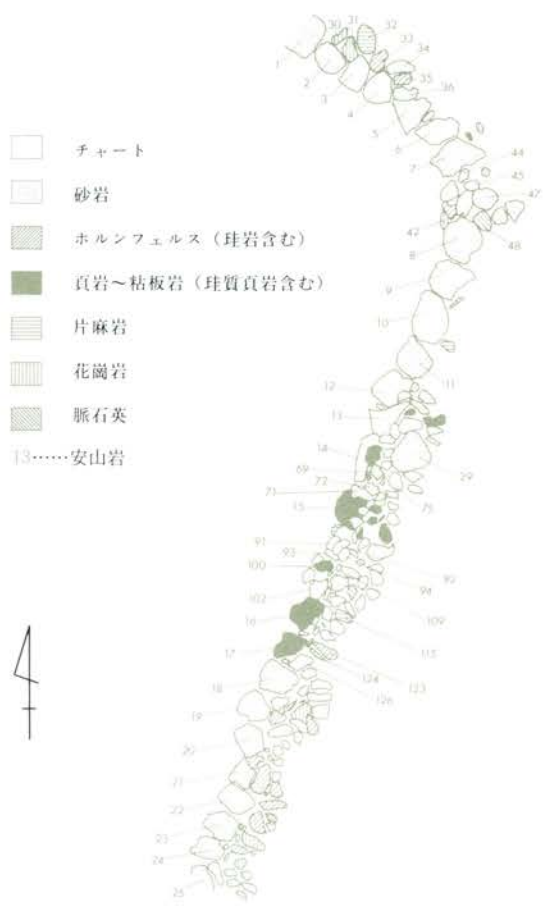


第13図 礫の大きさの測定方法



第14図 礫の円磨度の段階表

発掘調査により検出された現位置および崩落石の葺石の石材を調査する機会が、田辺町教育委員会より与えられたので、その葺石について各種の測定を実施したので測定値を主に記載するこ



第15図 くびれ部、後方部西コーナー葺石の石材

第16図 くびれ部、後方部西コーナー葺石の方向と傾き

とにした。

測定方法・項目 岩石は、主に肉眼観察とし、ルーペ等も用いて決定した。

岩石の大きさは、第13図のように長径、中径、短径を測定し、3軸の平均径も求めた。茸石は、ふつう奥の方が見えないので、ドライバーなどを用いて、石の先端を探って求めた。重さは、料理用はかりと体重計により測定した。

岩石の円磨度は、第14図の段階表を使用して求めた。

岩石の風化度は、肉眼観察により次の4段階にわけた。新鮮一岩石の表面および内部がほとんど風化していないもの。弱風化一岩石の表面や節理、層理面などに沿って、厚さ数mm程度かそれ以上の風化が進んでいるもの。中風化一岩石の風化が表面から中心まで達しているが、ハンマーを使わないと割れないもの。強風化一岩石の風化が表面から中心まで達し、きわめて風化が激しいので、手で握りつぶせるほどに軟らかくなっているもの。

岩石のその他の特徴としては、色、粒度、鉱物の種類や集合状態等々を調べた。

茸石の石材 茸石として使用されている岩石名としては、チャート、砂岩、頁岩～粘板岩（珪質頁岩を含む）、ホルンフェルス（珪岩を含む）、脈石英、花崗岩、片麻岩、安山岩の8種類である。

各種の項目について測定した茸石の番号を第15・17・18図にしめす。それらの測定結果を第1表にしめす。なお、8トレンチの周濠内崩落石は、特に重さを測定することができた。

第15・17・18図に岩石名分布図をしめす。

5 トレンチ

南側のくびれ部で、周濠から墳丘に変化する部分が残存している。番号1～25は、根石で、平均径13～21cm程度の人頭大の大きさで、砂岩12個、チャート9個、珪質頁岩3個、安山岩1個となっている。風化度は、新鮮、弱風化であり、あまり風化は進んでいない。円磨度についてみると、0.2～0.4程度の角ばった河床礫が多く使われ、0.5～0.6程度のものは少ない。

これらのことから、根石は、人頭大で風化のあまり進んでいない角ばった河床礫が多く使われており、木津川支流の当時の河川か、あるいは低い段丘等の地層の礫を使用したと考えられる。なお、根石の安山岩(㊸)1個は、墳丘上の盗掘口付近に散在する竪穴式石室の壁体と考えられる安山岩の特徴と完全に一致するものであり、同石室築造時の安山岩を使用したものである。

根石以外の茸石は、平均径は数cmから10cm程度の握りこぶし大の小ぶりの大きさの岩石であり、新鮮、弱風化のものが多いが、中風化程度のもものが混る。円磨度は、根石と同じ2つのグループのもものがあり、角ばったものとやや丸いものがある。片麻岩礫の領家帯分布地のものもあることから、周辺や直下の地層の礫層中の礫が使用されたものと考えられる。花崗岩とホルンフェルスは、周辺の松井ヶ丘から大住ヶ丘付近に分布するものに鉱物組成がよく似ており、その付近のものが谷によって運ばれた礫を、当時の谷川か地層中より採取したと考えられる。

5-2、10、13トレンチ

根石とその他の茸石についてみると、5トレンチとよく似た結果になり、茸石の産地について

も同様であると考えられる。

8 トレンチ

前方部の周濠内に崩落した葺石と考えられる石材について測定した。ホルンフェルスが最も多く、次いで花崗岩、チャート、砂岩、脈石英と少なくなっている。人頭大で重さ数kgの大きなものから、握りこぶし大の重さ1kgの小さなものにまでわたる。円磨度についても0.2~0.6までにわたり、2つのグループにわかれる。風化度は、新鮮、弱風化のものが使われている。

ホルンフェルスや花崗岩が多いことや、やや角ばったものや、やや円磨されたチャートが多いことから、前にのべたように、この周辺が直下の当時の谷川か、木津川支流の低い段丘等の地層中より採取したと考えられる。

葺石の石組み

地質調査用のクリノコンパスを使用して、長軸と中軸の伸びの方向と水平面からの傾斜を求めた。測定結果は第16図にしめす。

5 トレンチ

くびれ部に相当する根石番号⑦と⑧の間は、小さな葺石が使用されており、同様な箇所は⑤と⑩の間にみられる。意識に、このような葺石が使われていると考えられ、何らかの作業単位区分をしめすものかもしれない。これによって、仮に場所を3区分すると、両側の場所の根石をみると、長軸を墳丘斜面に直交するようにして周濠内に傾斜させており、一種の小口積み的な葺き方をしている。それに対して、中央の根石は、2通りあり、長軸を前記のようにしているものと、長軸を墳丘斜面に沿うように葺いているものがある。

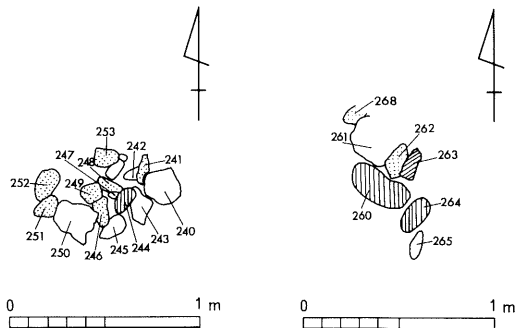
根石は、当然ながら据えるようにしているが、むしろ葺くというよりも帖するような状態に近い葺き方である。根石以外の葺石についても同様であり、帖るように葺いているようにみえる。

5-2 トレンチ

根石およびその他の葺石は、5 トレンチと同じように、長軸を墳丘斜面に直交させているものと、平行させているものの2通りがあり、また、その傾斜を見ると周濠側に傾斜させているものが多く、墳丘側に傾斜させているものは少ない。このように葺石は、帖るように近い葺き方が多く、墳丘側に傾斜するような葺き方は少ないようである。

まとめと今後の課題

検出された葺石は、残存状態やトレンチの数が少ないことにより、わずかの葺石を観察したにすぎない。今後多くのデータを必要とするが、今回の測定からは、8種類の岩石が使用されており、根石は人頭大であまり風化していない河床礫であり、その他の葺石は握りこぶし大の河床礫であり、これらの採取地は、周辺か直下の当時の河川か地層中に求められる可能性がある。な



第17図 後方部東コーナー
付近葺石の石材

第18図 前方部南コーナー
葺石の石材

お、安山岩の根石1個は、竪穴式石室の壁体の安山岩と一致するので同石室策造時に使用されたと考えられる。

葺石の石組みをみると、長軸、中軸の測定から、葺石は帖るようにして葺いたものが多く、少ないながらも墳丘斜面に傾斜するように葺いているものがみられた。

今後は、更に多くのトレンチでの葺石の測定を実施することにより、もっと多くのデータが得られ、総合的な分析を進めることによって、葺石採取地が明確になり、当時の葺石の葺き方の技術や労働力の問題などがしだいに明らかになると思われる。

番号	岩石名	大きさ(cm)		円磨度	風化度	備考	番号	岩石名	大きさ(cm)		円磨度	風化度	備考	
		長径, 中径, 短径	平均径						長径, 中径, 短径	平均径				
212	ホルンフェルス	11.10.7	9	0.4-0.5	弱	やや砂質	264	花崗岩	21.15.10	15	0.6	新		
213	真岩~粘板岩	7.5.5	6	0.5-0.6	弱~中		265	チャート	16.11.6	11	0.5	"	白黒	
214	砂岩	12.10.7	10	0.4-0.5	新~弱		266	"	10.8.4	7	0.4	"	灰	
215	真岩~粘板岩	12.6.2	6	0.3-0.4	"		267	砂岩	10.7.4	7	0.4-0.5	弱		
216	ホルンフェルス	10.6.4	7	0.5	弱	泥質	268	"	17.12.6	12	0.5	"		
217	片麻岩	12.9.3	8	0.5-0.6	新	花崗片麻岩	269	"	12.10.6	9	0.4	"		
218	砂岩	14.13.10	12	0.3-0.4	弱		270	"	8+.5+.3+	5+	0.5	"		
219	チャート	6.5.4	5	0.2-0.3	新	黄茶	271	チャート	8.7.6	7	0.6	新	白黒	
220	ホルンフェルス	8.5.5	6	0.4	"	泥質	272	"	10.8.6	8	"	"	茶白	
221	チャート	7.6.5	6	0.2-0.3	"	灰	聳石の石材測定値							
222	花崗岩	12.8.4	8	0.1-0.2	弱~中		8トレンチ(周濠内崩落石)							
223	ホルンフェルス	14.9.7	10	—	強	泥質	1	ホルンフェルス	27.13.11	17	4.5	0.3	新	泥質
224	"	12.7.4	8	0.3-0.4	新	"	2	"	24.9.7	13	1.5	0.4-0.5	弱	"
225	"(珪岩)	10.8.4	7	0.6	"	珪岩化	3	"	18.12.9	13	1.0	0.5-0.6	"	"
226	"(〃)	16.9.6	10	0.3-0.4	"	"	4	"	18.12.7	12	1.5	0.5	新~弱	"
227	花崗岩	13.11.7	10	0.6-0.7	中		5	"	20.7.5	11	1.0	"	弱	"
228	ホルンフェルス	19.12.6	12	0.6	弱~中	泥質	6	"	16.14.8	13	1.4	0.4	"	"
229	砂岩	18.14.6	13	0.4-0.5	"		7	"	17.12.5	11	1.2	0.5-0.6	新	"
230	チャート	12.6.5	8	"	新	赤茶	8	"	14.10.7	10	1.1	0.6	弱	"
231	"	8.6.3	6	0.5	"	白黒	9	"	19.12.6	12	2.2	0.4	"	"
232	真岩~粘板岩	10.5+.4+	6	0.6	新~弱	泥質	10	"	17.12.5	11	1.3	0.4-0.5	"	"
233	"	14.12.8	11	0.5-0.6	弱		11	"	12.11.9	11	1.0	0.4	"	"
234	砂岩	15.12.7	11	0.4-0.5	"		12	"	20.11.8	13	2.5	"	"	"
235	"	10+.8+.5+	8	0.5	"		13	"	15.13.7	12	1.0	"	新~弱	"
236	花崗岩	13.8.8	10	0.2	"		14	"	18.12.8	13	1.5	0.3	弱	"
237	ホルンフェルス	9.7.5	7	0.2-0.3	新	泥質	15	"	12.9.2	8	0.4	0.6	"	"
238	脈石英	4.2.2	3	0.6	"		16	"	16.12.6	11	1.0	0.4	"	"
聳石(現位置石)の石材測定値							17	"	19.11.4	11	1.0	0.5	"	"
10トレンチ(後方部東コーナー南東側)							18	"	22.13.9	15	3.0	"	"	"
240	チャート	26.20.14	20	0.1-0.2	新	白黒	19	"	15.12.4	10	0.8	0.4	"	"
241	砂岩	19.8.6	11	0.1	弱		20	"	22.13.5	13	1.5	0.5	"	"
242	チャート	9.8.5	7	0.4-0.5	新	赤黒	21	"	18.9.6	11	1.3	"	新~弱	"
243	"	21.13.8	14	0.1	"	赤白	22	"	18.12.5	12	"	"	弱	"
244	花崗岩	16.11.8	12	0.6	弱~中		23	"	17.15.4	12	1.4	"	"	"
245	チャート	13.10.4	9	0.5-0.6	新	灰	24	"	20.14.12	15	4.0	0.3	"	"
246	砂岩	14.11.8	11	0.1	弱		25	"	22.14.10	15	3.0	0.4	"	"
247	チャート	7.4.3	5	0.5-0.6	新	茶黄	26	"	17.12.12	14	2.5	0.5	"	"
248	砂岩	19.10.7	12	0.3-0.4	弱		27	"	18.11.6	12	1.5	"	"	"
249	"	15.10.7	11	0.1	新~弱		28	"	16.9.7	11	1.0	"	"	"
250	チャート	24.19.15	19	0.1-0.2	新	黒茶	29	"	17.12.6	12	"	0.4	"	"
251	砂岩	16.10.5	10	0.3-0.4	弱		30	"	17.8.6	11	"	"	"	"
252	"	20.15.7	14	0.3-0.4	"		31	"	11.7.7	8	0.8	0.5	"	"
253	"	16.14.8	13	0.3	"		32	"	15.11.4	10	0.6	"	"	"
聳石(現位置石)の石材測定値							33	"	15.13.5	11	1.1	"	新~弱	"
13トレンチ(前方部南側コーナー)							34	"	16.12.7	12	"	0.4	"	"
260	花崗岩	30.17.15	21	0.5	新~弱		35	"	13.7.7	9	0.8	0.5-0.6	"	"
261	チャート	30.28.13	24	0.1-0.2	新	黄茶	36	"	15.10.4	10	"	0.5	弱	"
262	砂岩	26.15.13	18	0.1	新~弱		37	"	15.9.1	8	0.4	"	"	"
263	ホルンフェルス	23.10.9	14	0.5	弱		38	"	12.8.7	9	0.8	"	"	"

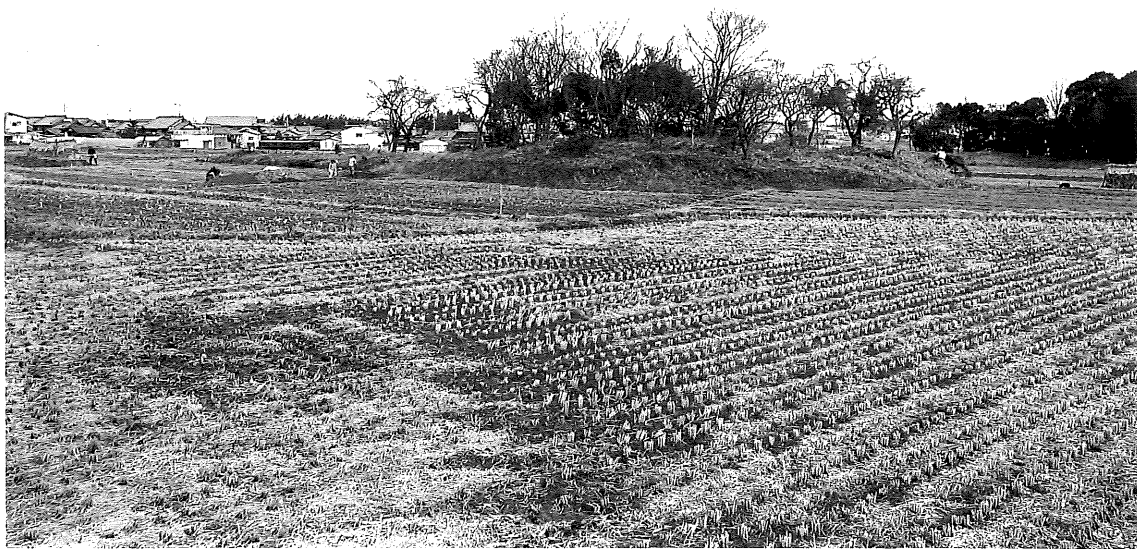
番号	岩石名	大きさ (cm)		円磨度	風化度	備考	番号	岩石名	大きさ (cm)		円磨度	風化度	備考	
		長径, 中径, 短径	平均径						長径, 中径, 短径	平均径				
39	ホルン フェルス	23.8.6	12	1.1	0.5	弱								
40	"	14.9.5	9	0.5	"	"	65	チャート	20.14.8	14	3.0	0.3- 0.4	新	白黒
41	黒雲母 花崗岩	21.10.7	13	1.5	0.3	新~弱	66	"	16.11.6	11	1.0	0.4	"	"
42	"	18.11.6	12	0.9	0.5	"	67	"	15.12.9	12	2.0	0.3	"	"
43	"	22.14.9	15	2.0	0.4	弱~中	68	"	24.15.11	17	3.0	"	"	"
44	"	14.12.8	11	1.5	"	弱	69	"	17.8.7	11	0.9	0.4	"	"
45	"	14.12.4	10	0.9	0.4- 0.5	"	70	"	15.12.4	10	0.6	0.3	"	"
46	"	19.10.7	12	1.4	0.3- 0.4	"	71	"	13.11.6	10	0.8	0.4- 0.5	"	"
47	"	17.10.6	11	1.0	0.5	新~弱	72	"	13.9.5	9	0.5	0.5- 0.6	"	"
48	"	20.8.5	11	0.8	0.4	弱	73	"	15.10.8	11	1.0	0.5	"	"
49	"	15.12.4	10	0.6	"	"	74	"	13.9.6	9	0.6	0.6	"	"
50	"	15.10.5	10	0.7	0.5	新~弱	75	"	16.10.6	11	0.9	0.4	"	"
51	"	16.9.8	11	1.2	0.4- 0.5	弱	76	"	14.10.8	11	"	0.3- 0.4	"	"
52	"	18.9.6	11	0.9	0.4	新~弱	77	"	13.9.8	10	1.0	0.5- 0.6	"	"
53	"	18.12.5	12	0.7	0.2	"	78	"	14.11.8	11	0.9	0.5	"	"
54	"	15.9.6	10	0.5	0.6	"	79	"	12.11.4	9	0.5	"	"	"
55	"	20.12.11	14	2.5	0.4	弱	80	砂岩	26.20.14	20	7.3	0.4	新~弱	細粒砂
56	"	20.7.4	10	0.7	0.5	新~弱	81	"	22.14.7	14	2.5	"	"	中粒砂
57	"	17.12.6	12	0.8	0.4	弱~中	82	"	19.11.5	12	1.0	"	"	"
58	"	12.10.6	9	0.5	0.5	弱	83	"	15.10.7	11	"	0.4- 0.5	"	細粒砂
59	"	16.10.5	10	0.6	"	弱~中	84	"	22.15.7	15	1.8	0.3	新	中粒砂
60	"	12.9.5	9	0.5	0.6	弱	85	"	14.11.7	11	0.8	0.4	弱	細粒砂
61	チャート	22.20.19	20	9.0	0.4	新	86	"	14.12.8	11	1.0	0.3- 0.4	新~弱	"
62	"	17.12.6	12	2.0	"	"	87	脈石英	22.11.10	14	2.0	0.2- 0.3	新	"
63	"	25.14.7	15	2.6	0.3	"	88	"	20.12.9	14	"	0.5	"	"
64	"	20.16.10	15	2.5	0.3- 0.4	"	89	"	13.12.6	10	0.5	0.6	"	"
							90	"	9.8.4	7	0.3	0.5	"	"

☒

版



大住南塚古墳・大住車塚古墳 空中写真（上が北西）



(1) 大住南塚古墳 全景（南から）



(2) 大住南塚古墳 全景（西から）

図版第 3



(1) 大住南塚古墳 外堤部（南東から）



(2) 大住南塚古墳 墳丘北側の池（北から）



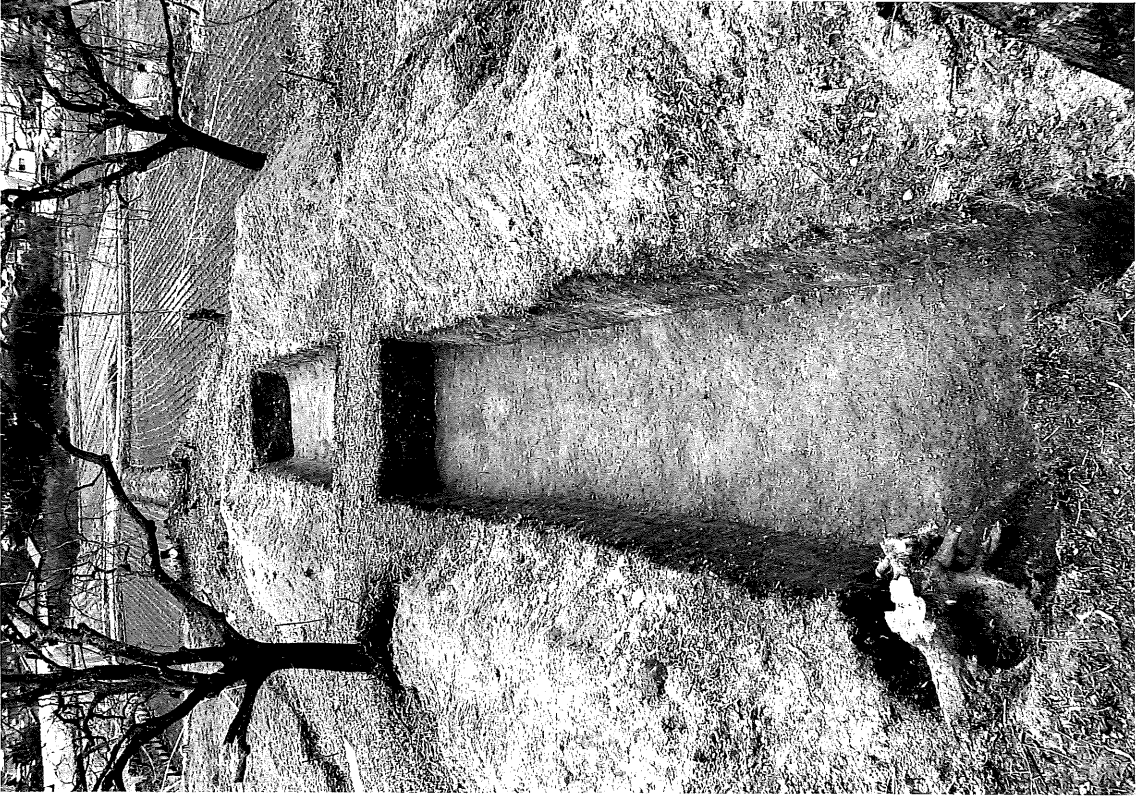
(1) 5-2 トレンチ 後方部西側コーナー (西から)



(2) 10 トレンチ 後方部東側コーナー付近 (南東から)



(3) 13 トレンチ 前方部西側コーナー (西から)

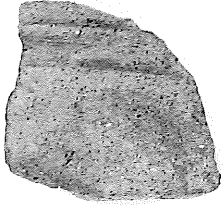


(1) F2トレンチ (南東から)



(2) F2トレンチ (北西から)

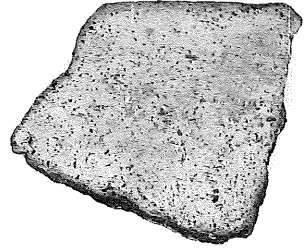
图 版 第 6



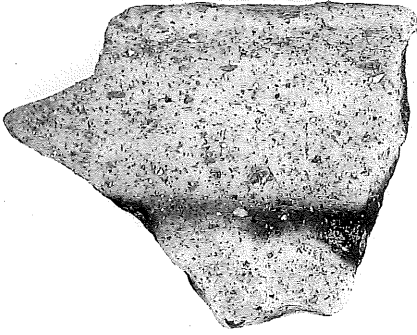
7



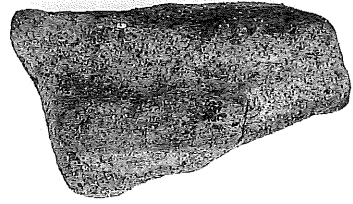
6



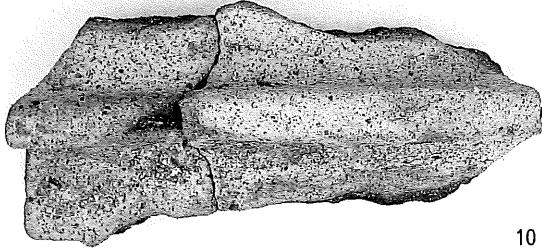
1



3



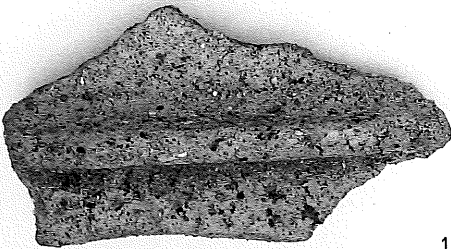
8



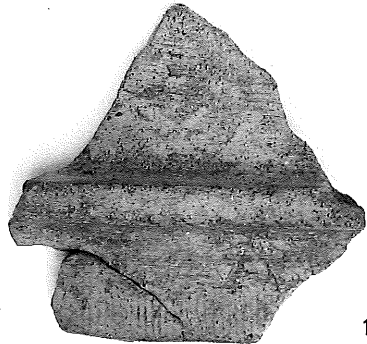
10



9



11



12

昭和62年3月30日 印刷
昭和62年3月31日 発行

大住南塚古墳発掘調査概報Ⅱ

(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第7集)

編集・発行 田 辺 町 教 育 委 員 会

〒610-03 京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字田辺80番地
電話 07746-2-9550

印 刷 明 新 印 刷 株 式 会 社

〒630 奈良市橋本町36番地
電話 0742-23-3131